ハーレムシークレット
Harem Secret
小説 竹内けん
挿絵 神保玉蘭／Hiviki N
立ち読み版

ハーレムシリーズの世界

グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
シュルビー
ベリージャム
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
ガラテイア
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

バーバラ

女騎士。ルーシーから英才教育を受けるエリートで王女の護衛を務めている。フランギースの友達でスペンサーとは顔見知り。

ルーシー

王妃アンサンドラの側近の女将軍。アンサンドラからスペンサーの寄親を任されている。
クラナリア王国の出身でドモス王国に激しく抵抗した過去がある。
夫は豪商レギンス。息子オルフィオはアレステリアと仲良し。

ライラ

プライドは高いが見た目は綺麗なお姉さん。知的で大人っぽい。
祖父はクラナリア王国の最後の宰相。
フランギースをライバル視している。

ツヴァイ

カッコイイ武人系お姉さんで実際にも強い。
ライラの親友で同じクラナリア王国出身。
鞭と魔法を合わせた独特な戦闘スタイルをしている。

スペンサー

見習い騎士。姉フランギースやドモス王国に寝返った父メイドリーの影響で苛められ気味。
姉の出世と同時にスペンサーも本格的なエリート教育が始まった。

フランギース

スペンサーの姉。ロレントの嫡男アレックスの乳母に任命され浮かれ気味。

第一章　裏切り者の子供たち　009
第二章　王宮での仕事　049
第三章　すべてお姉ちゃんが悪い　082
第四章　女将軍ルーシーの教え　119
第五章　少年は成長する　154
第六章　バザン討伐　196
ハーレムキャッスル外伝　イノセントな少女　247

いつもの凛々しい女騎士とは似ても似つかないふやけた声で抱きついてくる。
「あんな小娘よりも、あたしがたっぷりとかわいがってやるぞ♪」
深刻な女性不信に陥りそうになったスペンサーの腋の下から両腕を入れたツヴァイは、さらに上着をたくし上げて、胸元に手を入れた。そして、両の乳首を抓む。
「や、やめて、あ、あぅ、ああ……」
男でも乳首を弄られると感じてしまう。しかし、それを認めるのはなぜかとっても気恥ずかしい。
「か、かわいすぎる♪」
独り興奮するツヴァイの様子に、ライラは醒めた視線を送る。
「二十年来の親友とはいえ、こんな年端もいかない[redacted]に欲情しているさまを見ていると、付き合い方を考えたくなるわ」
「べ、別にいいだろ。女同士よりは健全だ」
まるでウサギの人形を抱えたアレステリア姫のように、ごっつい女騎士が[redacted]い男の子を抱きしめている光景に、ライラは肩を竦める。
「恋人を前にしてそれを言うかな？」
「恋人？」
戸惑うスペンサーに、ライラは嗤う。
「わたくしとツヴァイよ。お互いバカな男に興味は持てなかったからね。友情の延長線上

でそういうこともやっているわけ」
「お、女同士で……」
女同士の愛などというものを、想像したこともなかった純真な少年は戸惑ってしまう。
「そ、ここはいわば、わたくしたちの愛の巣なのよ」
ライラも、ツヴァイも、二十歳前後の綺麗なお姉さんだ。
二人とも乳房は大きいし、スタイル抜群。男など引く手あまたであろう。それなのに女同士で付き合うなんてもったいないと思うのは、男のエゴだろうか？
一方、ツヴァイの暴走は止まらない。
「おまえ、大きなおっぱいが好きなんだろ？」
「え、まぁ……嫌いではないというか……」
「隠さなくてもいい。おまえはいつもあたしの胸ばかり見ているからな。あたしのおっぱいはバーバラなどよりはるかに大きいぞ」
自慢げに笑ったツヴァイは、腹部を大胆に切り取り、下乳の見える軍服の裾に手をかけると、そのままたくし上げた。
プリンッ！
口元を隠す黒いインナーと一体化した生地が巨大な乳房を包んでいた。
普段から下乳が覗いているだけあって、インナーも乳首をかろうじて隠すようなミニサイズだ。

そして、そんなミニランニングシャツもツヴァイはたくし上げる。
「おお！」
コンガリと日焼けした巨大な乳房があらわとなった。
（で、でかっ⁉）
本人が言うだけあってバーバラの乳房よりも、はるかに大きい。
アンサンドラの乳房のほうが大きい気がするが、年齢の違いか、経産婦と未産婦の違いなのかわからないが、同じ巨乳でも、勢いが違った。
パンパンに張りがある。そして、日焼けしているせいか、とってもエロい。
乳首はチョコレートを連想させて、とっても美味しそうだ。
「ごくり……」
物欲しそうに喉を鳴らしてしまったスペンサーの頭を、ツヴァイは抱き寄せる。
「さぁ、食べろ」
巨大なチョコレートケーキを連想させるおっぱいに顔を埋めたスペンサーは、口元にきた乳首を反射的に咥えてしまい、チュウチュウと吸引した。
（ああ、ツヴァイさんのおっぱいだ♪）
見た目は甘いチョコレートだが、味わいは当然ながらチョコレートではない。
しかし、チョコレートを頬張ったかのような幸福感が口内に広がる。
「気に入ったみたいだな。なら、ベッドにいくぞ」

スペンサーにおっぱいを与え抱えたまま、ツヴァイは軽々と立ち上がった。
そして、寝室に移動する。
巨大なベッドがあった。おそらく、ライラとツヴァイが愛し合っている場所なのだろう。
その真ん中に腰を下ろし胡坐をかいたツヴァイは、膝の上にツヴァイを乗せて愛しげに抱きしめる。
スペンサーは夢中になっておっぱいを吸う。
「ああ……いい♪　こんなに一途に吸われたら、ああ」
恍惚となるツヴァイの姿に、寝室に付いてきたライラは肩を竦める。
「まったく、所詮、あんな女の弟なんて、猿よね。どんな女のおっぱいでも食べたがる。ほんと程度が知れるわ」
そう嘯いたライラは、服を脱ぎ始めた。
「……っ」
ツヴァイの乳房を吸いながら横目に見たスペンサーは目を剥く。
官服を脱ぎ棄てると、紫色のブラジャーとショーツがあらわとなる。ライラはそれもまったく躊躇うことなく脱ぎ棄てた。
スレンダーな身体なわりに、巨大な白い肉の塊がまろびでた。
ライラの白い乳房は、ホワイトチョコレートを連想させる。ピンク色の乳首はイチゴチョコといったところか。

きついお姉様なのに、おっぱいは甘そうだ。
股間には頭髪と同じ白銀の陰毛が逆巻いている。
「これが見たかったんでしょ」
スッポンポンとなったライラは、己が肉体美を誇示するかの如く、右足を前にしたモデル立ちになると、白銀の長髪を首の後ろで掻きあげて、フワリと整える。
(うわ、ライラさんの裸っ!?)
好きな男とか、異性として意識している相手の前でなら、ライラも女らしく恥じらってみせたのだろうが、ガキと侮るスペンサーには、恥じらうだけバカらしいと考えているらしく、実に堂々たるものだ。
「なんだ、ライラもなんだかんだ言ってやる気満々じゃないか?」
「ふん、あの糞生意気な女の弟を徹底的に辱める、というなら、わたくしも協力するのはやぶさかじゃないのよ」
そういってベッドに四つん這いで乗ってきたライラは、ツヴァイの膝に腰を下ろすスペンサーのズボンを引きずり下ろしにかかる。
(あ、やめて……)
スペンサーは恥じらうも、ツヴァイに抱きしめられている今の姿では抵抗する余地はない。
あっという間にズボンとパンツが引きずり下ろされて、中からいきり立つ逸物がピョン

ッと飛び出す。
その光景を見てライラは失笑する。
「ダサ！　小さい上に完全包茎。毛も生えてないのね。まぁ、予想はしていたけど、ほんと粗末なおちんちんね」
逸物は男にとって一番プライベートな場所だ。そこを綺麗なお姉さんにバカにされるのは、やはり傷付く。
落ち込むスペンサーを庇うようにツヴァイが抗議する。
「小さくてかわいいじゃないか♪」
「おちんちんは大きいほど価値があるのよ。まして包茎だなんてゴミよ」
侮りながら左手で頭髪を押さえたライラは、右手を伸ばし人差し指で肉袋を突っつく。
「ぷりっぷりね。この中に白子が詰まっているわけでしょ。プチッと潰したくなるわ」
「そ、それはやめて……」
ライラならそれくらいやりかねないと怯えたスペンサーは、ツヴァイのおっぱいから口を離して訴える。
「さて、どうしようかしら？」
嗜虐的に笑ったライラは、次いで包皮に包まれた肉棒を親指と人差し指で抓むとシコシコと扱いた。
「はぅ！」

プシュッ！　ドビュ！　ドビュッ！
包皮の先端の穴から白濁液が勢いよく飛び出し、ライラの雪のような顔を汚した。
「……えっ」
ライラは茫然とする。
「まさかもうイったの？」
「ご、ごめんなさい」
ジロリと睨みあげられたスペンサーは、ツヴァイの乳房に隠れるようにして謝罪する。
「短小包茎早漏って、まさにダメちんちんの見本ね」
「う……」
ぐうの音もでないスペンサーを抱きしめながら、ツヴァイが笑う。
「ライラ、顔真っ白よ。それって顔射っていって、男はまるで女を征服したような気分になって気持ちいいらしいよ」
同性の恋人に笑われたライラはむすっとする。
「よくもやってくれたわね。わたくしの顔にこんな汚いものをかけるだなんて。身のほどを知りなさい」
癇怒したライラは、その場で立ち上がり、スペンサーに尻を向けると、前かがみとなった。
白い桃尻がスペンサーの鼻先にくる。

肛門はもとより、ぱっくりとした陰唇まで丸見えだ。
「……」
思わずスペンサーが見入ってしまうと、さらにライラは右手を股の間に入れて、人差し指と中指で肉割れをクパッと開く。
膣孔から牝の匂いが甘く漂ってくる。
「どう、女性の生殖器を見たのは初めてでしょ」
「う、うん……」
初めてではないのだが、ここは合わせたほうがいいかな、と思った。
「舐めたい？　しゃぶりたい？　指で弄りたい？　それとも貧相なおちんちんをぶち込みたい？」
「え、えーと……」
どれもやってみたい、というのが偽らざる感想だ。しかし、どれを答えても、ライラは許してくれない気がした。
答えを躊躇っていると、案の定、ライラは拒絶する。
「ダメよ。おまえになんかもったいないわ」
次の瞬間、お尻がスペンサーの顔を覆い潰した。
「うっぷ」
スペンサーの頭は、後頭部にはツヴァイのおっぱい。顔面にはライラのお尻でサンドイ

ッチにされた形だ。
「お尻の穴でも舐めていなさい。おまえは、わたくしのお尻の穴を舐めている程度がお似合いよ」
言われた通り、スペンサーは舌を伸ばして、肛門を舐めた。
ペロリペロリ……。
「あっ」
驚いたライラは尻を離して振りかえると、きっと睨んでスペンサーの頬を往復で叩いた。
パン！　パン！
「本当に舐めるだなんて、ドスケベなガキって度し難いわ」
「う……」
「おまえから舐めろといったんだろ。可哀想に」
苦笑したツヴァイは、怒るライラを抱き寄せると、その頬をペロリと舐めた。
「ライラの顔から男の味がする」
「屈辱だわ」
「ライラの肌はいつも極上だが、今夜は一段と美味しいドレッシングがかかっているな」
ツヴァイは丁寧にライラの顔を舐めたあと、その唇を奪った。
ライラは抵抗せずに受け入れる。
お互い同性愛関係で同居しているのだ。接吻ぐらい日常的であろう。ただ、二人の間に

はスペンサーがいるというところが、いつもとの違いだ。
二人のおっぱいで、スペンサーの顔が挟まれる。
（お、おっぱいのサンドイッチだ）
極上おっぱいがパンで、スペンサーは具だ。
二人は寝台に倒れ込み、狭間にあるスペンサーもまた倒れる。　両腕を後ろ手に縛られているため、極上おっぱいに触れることはできないが、顔全体で弾力を楽しむ。
やがてキスを終えたライラが呆れる。
「こいつってほんとおっぱい好きよね。ママのおっぱいが恋しい年頃ってことかしら？　それとも、男ってみんなこんなものなのかしら？」
「さぁ、男の生態はよくわからんが、こいつはスケベなおっぱい好きなところも含めてかわいいじゃないか」
あー、はいはい。と言いたげな呆れた表情をしたライラは、不意にツヴァイの横の開いた袴のようなスカートをたくしあげると、中からフンドシのような白い布地の小さなショーツを奪い取る。
「こんなに濡らして、そんなにこのスケベ猿のしょぼいおちんちん食べたいの？」
ツヴァイも負けじと、ライラの股間に手を入れる。
「ライラだって、凄い濡れているぞ」
「わたくしはほら、あなたが興奮しているから共鳴しているのよ」

さすがは恋人同士。勝手知ったる身体なのだろう。二人は仲良く指マンを楽しむ。
「なぁ、そろそろいつものあれをやらないか？」
「別にいいけど……」
「それじゃなぁ、今日は特別に……」
ツヴァイがライラの耳元でなにやら囁く。それを受けてライラは目を見張る。
「まったく、ツヴァイったら面白いこと思いつくわね。まぁ、いいわ。ツヴァイの頼みなら聞いてあげる」
なにやら相談をまとめたお姉さん二人は、スペンサーを仰向けに倒すと、その右手側にツヴァイ、左手側にライラが腰を下ろした。そして、二人とも盛大に股を開くと、スペンサーの腰の上で合わせた。
「うっ」
スペンサーの短小包茎ちんちんが、左右から挟まれた。それも濡れた媚粘膜によって。
「はぅぅぅぅ」
予想もしたことがなかった快感にスペンサーは身悶える。
すなわち、逸物の右側からツヴァイの陰唇、左側からライラの陰唇が合わさったのだ。
女同士の性戯の定番の一つ「貝合わせ」。ライラとツヴァイも当然のように楽しんでいたことだろう。
その狭間に逸物を入れた形だ。

考えたこともなかった質問に面喰ったスペンサーは、返答に窮した。
ルーシーは重々しく告げる。
「それは自分の命よりもはるかに重い責任を持っている人ということだ」
「はぁ……」
責任とかあまり考えたことがなかったスペンサーは、適当に相槌を打つことしかできない。
「失敗したら、自分の命では賠えるはずもないほどの大きな損害が出る。そういう立場にいる人間を、エリートと呼ぶのだ。そして、おまえはその道を歩んでいる。決して失敗は許されない、ということを肝に銘じることだ」
「……」
凝然とするスペンサーの瞳をはっしと睨みながら、ルーシーは語り聞かせる。
「すでにおまえは言ってはいけない秘密をいくつか抱えているな。それは墓場まで持って行け」
「はい」
スペンサーの答えに、ルーシーは頷く。
「よし」
そう言ってルーシーは破顔した。
「寄親だというのに、おまえの教育は部下たちに任せきりだったからな。たまにはわたし

が手ずから教えてやろう」
「ありがとうございます」
ルーシーは執務机の脇に置かれていた呼び鈴を鳴らした。
即座に現れた従士に軽く命令する。
「今日の仕事は終わりだ。わたしには火酒を、こいつにはなにか適当なジュース……おい、なにが飲みたい？」
「え、それじゃ、トマトジュース」
「だそうだ。それを頼む」
ただちに従士は退出し、ルーシーは執務机から立ち上がった。
「席を移そう。おまえもこちらに座れ」
部屋の隅にあった応接用のソファーにルーシーは腰を下ろす。低いガラスのテーブルを挟んで、向かいにスペンサーは腰を下ろす。
「さて、青少年の悩みの相談を受けよう。なんでも聞いてこい」
ルーシーは寛げというかのように、両手を開いて背凭れに預けながら、ぴったりとしたズボンに包まれた肉感的な足を傲慢に組む。
（いや、そんなことを言われても……あ、そうだ）
なんとか話題を思いついたスペンサーは慌てて口を開く。
「ルーシー将軍ってご自宅に帰らずに、いつもここで寝起きをしているんですか？」

「ああ、そうだな。家になど一ヶ月に一度帰るかどうかだな」
「お忙しいんですね」
仕事の鬼である師匠に、スペンサーは感心することしかできない。
（そういえば、エウリカさんも、ルーシー将軍はめったに商会に顔を出さないって言っていたもんなぁ）
ついつい言わずもがなのことを質問してしまう。
「旦那さんとかお子さんとか、なにも言わないんですか？」
「ん？　そうだな？　旦那殿は、ローテーションからいうと、今日は赤毛の女のところかな？」
「いっ⁉」
息を呑むスペンサーに、ルーシーはなんでもないと言いたげに右手で宙を払う。
「夫婦間の形などそれぞれだ。甲斐性のある男が愛人を囲ってなにが悪い。わたしも妻として完全には程遠いからな」
ルーシーはまったく気にしていないようである。
昔話に聞くところによると、ドモス軍がルーシーの奮戦などによりカーリング城の攻略の苦戦をしているなか、王妃アンサンドラが、スペンサーの父である財務大臣メイドリーに裏切りを促す手紙を出した。
その密使を務めたのが、なんと当時駆けだしの商人であったレギンスなのである。

つまり、決死の籠城戦を戦っていたルーシーの思惑をぶっ潰した男と結婚し、子供まで儲けているのだ。

（大人の事情なんだろうなぁ）

と納得するしかない複雑な人間関係である。

そんな話をしているところに先ほどの従士が、お盆に火酒とトマトジュースを持ってくる。

それを右手に持ったルーシーは一気に呷る。

「ゴクリゴクリゴクリ……」

喉を鳴すルーシーの豪快な姿を、スペンサーは茫然と見る。

飲み終えたルーシーは口元を左手の甲で拭いながら、自分を見ているスペンサーを見返す。

「ふぅ～、どうした？　わたしの顔になにか付いているか？」

「いや、いい飲みっぷりだなぁ、って」

「これだけはやめられん。わたしの悪癖だな」

自嘲するように笑ったルーシーは、左手の指先で空となったグラスを弾いた。

「で、ライラとツヴァイとなにかあったのか？」

「別に……」

女が怖いなどと言ってしまった以上、二人の名前が出るのは仕方がないことだろう。

動揺して否定するスペンサーを、ルーシーは嘲る。
「ほぉ、二人とセックスしまくっているようだが、おまえにとっては別に、か？」
「いっ⁉」
絶句するスペンサーに、悪戯っぽく笑ったルーシーは追い打ちをかける。
「ついでに言えば、バーバラとは人目を忍んでキスやペッティングを楽しむ仲。三股とはやるな」
「うっ」
「なんだ、もしかして四股か？」
ゾクッとする。
スペンサーはバーバラ、ライラ、ツヴァイと関係を持っているだけではなく、実は決して口にできない方とも関係があった。
その方は、溢れ出る母乳の始末に困り、代償行為として身近な小姓であるスペンサーにおっぱいを吸わせるのだ。
母乳を吸わせながら、白魚のような繊手で逸物を優しく扱いて射精を促してくる。
そのひそかな行為は、だれにも知られるわけにはいかない。そんなスキャンダルが公になれば、自分だけではなく、アンサンドラ、さらにはクラナリア派と呼ばれる人々に迷惑がかかるからだ。
「その可愛い顔を利用して、ずいぶんと美味しい思いをしているようじゃないか？」

「いや、そういうわけではなく、単にぼくが遊ばれているだけで……」
必死に言い訳をするスペンサーを、ルーシーは嗤う。
「セックスをしているのに、遊ばれているもなにもないだろ。それともバーバラがやらせてくれないのが不満か？　まぁ、若い処女娘がなかなか踏ん切りがついないのは仕方のないことだ。焦るな」
「そういうことではなくて、なんというか、ぼくのおちんちんのことを小さいってバカにするんです。それに包茎で早漏だって……」
ルーシーは不思議そうな顔をする。
「小さいのか？」
「はい」
「なら見せてみろ」
当たり前に命じられて、スペンサーは息を呑む。
「いっ⁉」
「実物を見ないと判断のしようがない」
ルーシーに詰め寄られたスペンサーは、仕方ないので恐る恐る逸物を出す。コワい師匠に披露するとあって、逸物は情けないほどに萎縮していた。
「ふむ、まぁ、普通だろ」
右手の拳を口元に置いたルーシーは、左手を伸ばして人差し指で逸物を突っつく。

「はぅ」
ツン、ツン、ツン、ツン、ムクリ……。
「お、勃った」
笑ったルーシーは、さらに包皮に指をかけると、ズルリと引き下ろす。
「ふっ、包茎とはいえ剥き癖が付いているな。ずいぶんといろんな女に食べさせているようだ」
「そ、それは……」
どう言い訳しようかと考えているうちに、ルーシーはその場に屈みこむと顔を近づけて、ぱくりと逸物を頬張ってしまった。
（う、ルーシー将軍がぼくのおちんちんをしゃぶっている⁉）
冗談など通じない厳しい人だと思っていただけに、まさか逸物をしゃぶってくる姿など想像したこともなかった。
「あぅ……」
しかも上手い。さすがは人妻。
濡れた舌が肉棒に絡みつき、しかも吸引する。
「ルーシー将軍、そんなことされたら、ぼく、もう、はぅ⁉」
どびゅ！　どびゅ！　ドビュッ！
口内で射精されても、ルーシーは慌てず騒がすに受け止めた。

びくっ！
「ちょ、ちょっと、やめてよ、こんなところで」
「ちょっとだけ。ちょっとだけいいでしょ」
慌てたバーバラは小さな声で抗議してきたが、スペンサーは甘えた声を出しながら、プリプリの内腿を撫であげていく。
（女性の太腿の張りってやっぱり年齢によって違うのかな。バーバラさんの太腿ってはちきれそうだ）
アンサンドラやルーシーの肌は柔らかく蕩けるようだった。ライラやツヴァイはしっとりツルツル。バーバラは弾き飛ばされそうな弾力がある。
「もう、仕方ないな。少しだけだよ」
日ごろからペッティングを日常としている関係である。いまさら触れられること自体を嫌がるはずがない。
「それじゃ」
スペンサーは遠慮なく、バーバラの黒いミニスカートをたくし上げる。
「って、いきなりスカートをめくるか、おまえは」
「へへぇ、どうせ外から見えませんって」
「それはそうだけど……」
笑って強引に事を進める悪戯小僧にジト目を向けたバーバラだが、結局、放置してしま

った。
おかげで壮麗なる回廊で、エリート女騎士は、白と水色のストライプのパンツを露出させることになる。
（バーバラさんって下着の趣味が少し子供っぽいよなぁ）
より大人なお姉様たちの、セクシーな下着を見慣れた目からすると、少し物足りない気分になる。
（でも、バーバラさんのお尻、小さく引き締まっていて素敵♪）
やはり年齢的な問題だろうが、スペンサーが関係を持った女性の中では、バーバラのお尻が一番、肉が付いていない。
ショーツ越しにお尻の谷間に指を入れると、肉溝をなぞってやる。
「はぁ……」
窓の外を見ながら、バーバラは物言いたげな溜息をつく。
「どうしたんですか？」
「いやね。男の子ってやつは、最初は初心（うぶ）でも、あっという間にドスケベに育つんだなぁって思って。あの純真なアレステリア様だと、将来男の正体を知って絶望しないか、心配になるわ……」
バーバラの皮肉にスペンサーも皮肉で返す。
「オルフィオくんでしたっけ、アレステリア様の想い人。そんなに心配なら、バーバラさ

んが、先にエッチして人となりを見極めたらどうですか？」
「バカ言ってなさい」
スペンサーの戯言を、バーバラは軽く流す。
まだまだ余裕といったバーバラの態度に、スペンサーは攻略意欲を刺激される。
（バーバラさんをもっともっと乱れさせたいな♪）
そんな牡としての欲望に捕らわれたスペンサーは、コットン生地のショーツに包まれた股の間から指を入れて、シコシコと扱いてやる。
ショーツ越しにも陰唇の形がすっかり浮き出ている。突起したクリトリスを弄る。
「ううん」
バーバラは喘ぎ声を我慢する。
（こうやってエッチなことはやらせてくれるのに、挿入を嫌がるということは、やっぱり、バーバラさんって処女なんだろうな）
バーバラの性感帯に関していえば、本人以上に把握しているスペンサーは、十分な前戯を施してから、ショーツを引きずり下ろす。
ヌラーと糸を引く。
「うわ、ドロドロですね」
「キミがやったんでしょ」
「はい。では、責任をもって舐め取ります」

ジト目を向けてくるバーバラに明るく応じたスペンサーは、屈みこみスカートの中に頭を突っ込む。

「ちょ、ちょっと、それは、やりすぎ……あっ♪」

動揺するバーバラの抗議などに耳を貸さず、スペンサーは両手で尻を割り、肛門を露出させた。

そして、あらわとなった菊華状の肛門をペロペロと舐める。

「ちょ、ちょっと、どこ触っているのよ」

バーバラは肛門に触られるのを恥ずかしがるというよりも、嫌がった。ツヴァイとは違って、本気で嫌がっているようだ。

（肛門はやめておいたほうがいいかな。ルーシー様が肛門は個人差があるから、嫌がる人には触ってはいけないっていっていたもんなぁ）

師匠の教えを忠実に守って、スペンサーは肛門に触れることを諦める。代わって、左右の親指を、膣孔の左右に添えて、ぐいっと開いてみせた。

「はぅ」

ビクンとバーバラの背筋が伸びる。

「へぇ、バーバラさんのこの中ってこうなっていたんだ」

以前、共に風呂に入ったとき、どぎまぎしているスペンサーをからかおうと悪戯心を刺激されたバーバラが、大開脚して見せたことがある。

そのとき、陰唇は見たことがあった。その光景はスペンサーの網膜にきっちりと焼き付いているが、大開脚は大開脚である。
大陰唇がそう開くものではない。中身はほとんど見えなかった。
その後、隠れてペッティングを楽しむ関係になったとはいえ、あくまでもペッティング。指で触らせてもらうだけだ。
中身までじっくりと見せてもらったことはなかった。
そんな極めてガードが堅かった局部に、夏の陽射しが降り注ぎ、キラキラと輝く。
「ちょ、ちょっと、そこを見るのはやめて」
「どうして？　バーバラさんのオマ〇コ、すっごく綺麗だよ」
ちょうどそのころ、階下の花畑でもアレステリアが、歓喜していた。
「うわ、この花すっごく綺麗♪」
「こっちの花のほうが絶対綺麗だけどね」
嘯いたスペンサーはヒクヒクと痙攣している膣孔に鼻先を近づけると、鼻から大きく息を吸う。
馥郁たる牝の香りだ。
処女膜があれば、その構造上、必ず裏側に下り物などが溜まる。そのため処女の陰唇からはどうしても強烈な異臭がするものだ。これがいわゆる処女臭というやつである。
ライラ、ツヴァイといったお姉様たちも、男性経験はなかったようだが、互いにレズ関

係を楽しみ、異物をぶち込んで処女膜を取り除いていたようだから、二人ともそれほど驚くような臭いはしなかった。
それに比べるとなかなか強烈だ。
「この花、すっごくいい香り♪」
「ぐっ」
期せずしてスペンサーとアレステリアの台詞が被った。
バーバラの顔がなんともいえない微妙な表情になる。
「ねぇ、この穴の奥に白っぽい膜がある。レンコンみたいに穴があいているけど、もしかして、これがバーバラさんの処女膜ってやつですか？」
「っ⁉　どこでそんな言葉を」
「へぇ～、バーバラさん、やっぱり処女だったんだ」
うすうす察していたことだが、確信を持ってスペンサーの頬が吊り上がる。
スペンサーにとってバーバラはなんでも知っているお姉さんの一人だった。しかし、今バーバラには経験がないことが知れた。一方で自分は、いろいろなお姉様に手ほどきを受け、ついにはライラやツヴァイといったおっかないお姉様たちを屈服させるまでのテクニックを身に付けたのである。
精神的にスペンサーは有利に立った。
調子に乗ったスペンサーは舌を錐のように伸ばすと、剥きだしになっている処女膜を舐

める。
「はぅ、そ、そこは……だめぇぇぇ」
「バーバラどうしたの？」
思わずバーバラは牝の悲鳴を上げてしまった。その声に花冠を持ったアレステリアが、不思議な顔で信頼する側近を見上げてくる。
「い、いえ、なんでもありません」
無垢なる主君の視線にさらされて、バーバラは必死に表情を整える。しかし、その下半身では、年下の恋人未満の少年が夢中になって処女膜を舐めまわしているのだ。
パチャピチャピチャ……。
「くぅぅぅぅ」
バーバラは必死に我慢するが、女性の身体には困ったことに被虐の歓びというものがある。
恥ずかしければ恥ずかしいほどに、より性感が高まるのだ。
ビク、ヒクヒクヒクヒク……。
（あはっ、バーバラさんったら感じている♪　感じている♪」
人目さえなければもっとあからさまに快感をあらわにしただろうに、純真無垢な主君の視線が気になって、アヘ顔を晒すわけにはいかないと感じたのだろう。バーバラは必死に表情を引き締めて耐える。

「？」
不思議そうに小首を傾げたアレステリアだが、やがて興味を再び花に転じてしまった。
友達たちと花漁りを再開する。
「はぁ～」
心から安堵の吐息をついたバーバラは、股の下の少年を叱る。
「もう満足したでしょ。今日はこの程度にしておきなさい」
「まだまだだよ」
そう嘯いたスペンサーは右手の人差し指を、そっと処女膜に添えた。
「ねぇ、バーバラさんのこれ、ぼくのおちんちんで破っていいかな？」
「だ、ダメに決まっているでしょ！」
バーバラは動揺した声を上げる。
「えー、なんで？」
「前にも言ったでしょ。そういうことは恋人同士がやるものなのよ」
「じゃ、恋人になろうよ。ぼくバーバラさんの恋人になる」
間髪をいれないスペンサーの宣言に、バーバラは動揺する。
「ちょ、なに簡単に言っているのよ。あたしのほうが年上なんだからね」
「そんなの関係ないじゃん。ぼくバーバラさんのオマ〇コにおちんちん入れたい。バーバラさんの処女膜、ぼくのおちんちんで破りたいんだ。ねぇ、ぼくが初めての男じゃ不満？

それとも他に好きな人がいるの？」
「そ、そういうわけじゃないけど、そのことはあとで話そう。今は仕事中なのよ」
友達以上、恋人未満。いや、限りなく恋人に近い年下の少年に、強引に言い寄られてバーバラは困惑し、その場をなんとか収めようとする。
（明確な拒否ってわけじゃないんだな。バーバラさんだって嫌じゃないんだ。ただ初めてだから怯えているだけだ）
それと確信したスペンサーは攻め方を変えることにした。
処女膜に触れさせていた指を下ろして、膣洞の腹部の裏側を探る。
（たぶん、このあたりだと思うんだけど……）
ビクンッ！
「っ⁉」
目を剥いたバーバラは、しなやかな身体を強張らせた。
（よし、あった。ぷっくりしているここがバーバラさんのGスポットだ）
たとえ処女であっても、Gスポットはあるものらしい。それと確信したスペンサーは、素早く指を動かす。
「ちょ、ちょっと、そこ、なに？　変っ⁉」
どうやら、バーバラはGスポットという性感帯の存在を知らないようである。初めての体験に困惑の声を上げる。

「へぇ～、バーバラさん、ここ気持ちいいんだ♪」
Gスポットを弄られてイったとき、女は潮噴きを起こす。
（潮噴いたあとの女性って、すっごく乱れるんだよねぇ）
そんなことを小賢しく考えたスペンサーは、バーバラをその気にさせようと、指を動かし続ける。
右手でGスポットを弄りながら、左手で淫核。そして、会陰部を舐める三点責め。
「はぅぅぅ」
健康な身体のバーバラは、感度も素晴らしくいい。
いつもバーバラとスペンサーが人目を忍んでペッティングを楽しむときには、お互いに性器を弄り合っていた。
だから、スペンサーのほうも余裕を持ってなかったのだが、今は一方的にじっくりと責めることができるのだ。
（バーバラさん、どこまで我慢できるかな？）
意地悪な好奇心を刺激されながら、一方的な愛撫を続けていると、再び花冠作りに熱中していたアレステリアが、二階の回廊から顔を出すバーバラに声をかけてきた。
「ねぇバーバラ。そこから見て、黄色い大きな花ってどこにあるかわかる？」
「えっ⁉」
二階にいるバーバラのほうが見つけやすい、と判断したのだろう。

惚けていたバーバラは、慌てて理性を呼び戻し、花畑を見渡す。
「み、右のほう……、あちらにでっかいチューリップが咲いています」
「うわ、ありがとう」
ちょこんとお礼をいったアレステリアは、友達と相談しながら再び花冠作りに熱中する。
「あはぁぁぁぁぁぁ」
バーバラが安堵の吐息をついた直後であった。
ぷしゅっ！　ジョロジョロジョロ！
バーバラの股間から大量の液体が撒き散らされた。
（うわ、バーバラさんも潮噴いた♪）
ライラ、ツヴァイに続いて、バーバラまでも強制的なGスポット絶頂に晒すことに成功する。
「はぁ……、はぁ……、はぁ……」
バーバラは肩で荒い息をしている。
そんな眼下では、大きな黄色いチューリップを付けて、アレステリアは満足する花冠が完成したようである。
「うふふ、できた。オルフィオくん歓んでくれるかなぁ」
無邪気に夢見るアレステリアを、隣国のお姫様たちがヨイショしている。
「バーバラもみてみて」

無邪気な天使は、花冠を自慢げに掲げてみせる。
「じょ、上手にできましたね」
下半身を露出させて、しかもいろいろな液体で濡らしているバーバラであったが、優しいお姉さん笑顔で猫撫で声を出す。
「うふふ、オルフィオくんにお嫁さんにしてもらうんだ♪」
花冠を抱いたアレステリアが、乙女チックな夢に浸っているその時であった。
（よし、今だ！）
必死に作り笑顔を作っているバーバラの腰を抱いたスペンサーは、いきり立つ逸物を突きあげた。
ブチン！
「はがっ」
眼下のお姫様に気を取られていたバーバラは、完全に油断していた。
親友の弟の逸物が、乙女の最終防衛ラインを打ち破ってしまう。
ずぶ、ずぶずぶ！
入口さえ突破してしまえば、あとは道なりだった。逸物は容赦なく最深部まで入る。
窓辺で笑顔を振りまいていたバーバラは、必死に表情を引き締めようとするが、両の黒目は頭上に裏返り、口元も歪んで半開きになる。
「これがバーバラさんのオマ〇コ。気持ちいいぃ～～～♪」

潮を噴かせた直後だけに、奥までぐっちょりと濡れていた。
バーバラとは初結合である。姉の親友の膣孔に逸物をぶち込んだスペンサーは、その心地好さに酔いしれる。
「く、ぐぅぅぅ」
表情を引き攣らせながらもバーバラは窓下の主君に笑顔で対応しながら、小さく毒づく。
「この悪ガキぃ～こんなところで入れるか」
「だって、バーバラさんをぼくのものにしたかったんだもん」
悪びれずに応じたスペンサーは、ゆっくりと抽送運動を開始する。
バーバラは慌てて、懇願した。
「ちょ、ちょっと、動くのはなし！」
「なんで、とっても気持ちいいよ」
産経婦であるルーシーに処女膜などあるはずがないし、ライラとツヴァイは互いのレズ遊びのときに、いろいろと異物を入れて破ってしまっていた。
そのためスペンサーは、処女の扱い方がわかっていない。ただただバーバラとの初体験に興奮して、欲望のままに腰を動かす。
「ねぇ、バーバラはどう思う。この花冠を渡したら、オルフィオくんは歓んでくれるかな？」
「そ、それはもちろんでございます」
破瓜の痛みに耐えながら、バーバラは必死に応じる。

グチョグチョグチョ……。

初めてだというのに、立ちバック。しかも、男はまったく気遣ってくれない。だからといって、よくある破瓜した乙女のように泣きわめくこともできないバーバラは、独り悶絶する。

「はぁ～、これってほとんど拷問にひとしいと思う。マジで死にそう～」

破瓜の痛みに耐えながらも、必死に優しいお姉さんの笑顔を取り繕うバーバラであったが、その目元からは人知れず涙の粒が溢れる。

そんな年上のお姉さんの苦労を、無邪気な少年はまるで察していない。

「バーバラさん、中に出しますよ」

「ば、バカ。それはやめろ」

バーバラは必死に訴えたが、もはやスペンサーは止まらない。

ぐいっと逸物を押し込んだ状態で射精する。

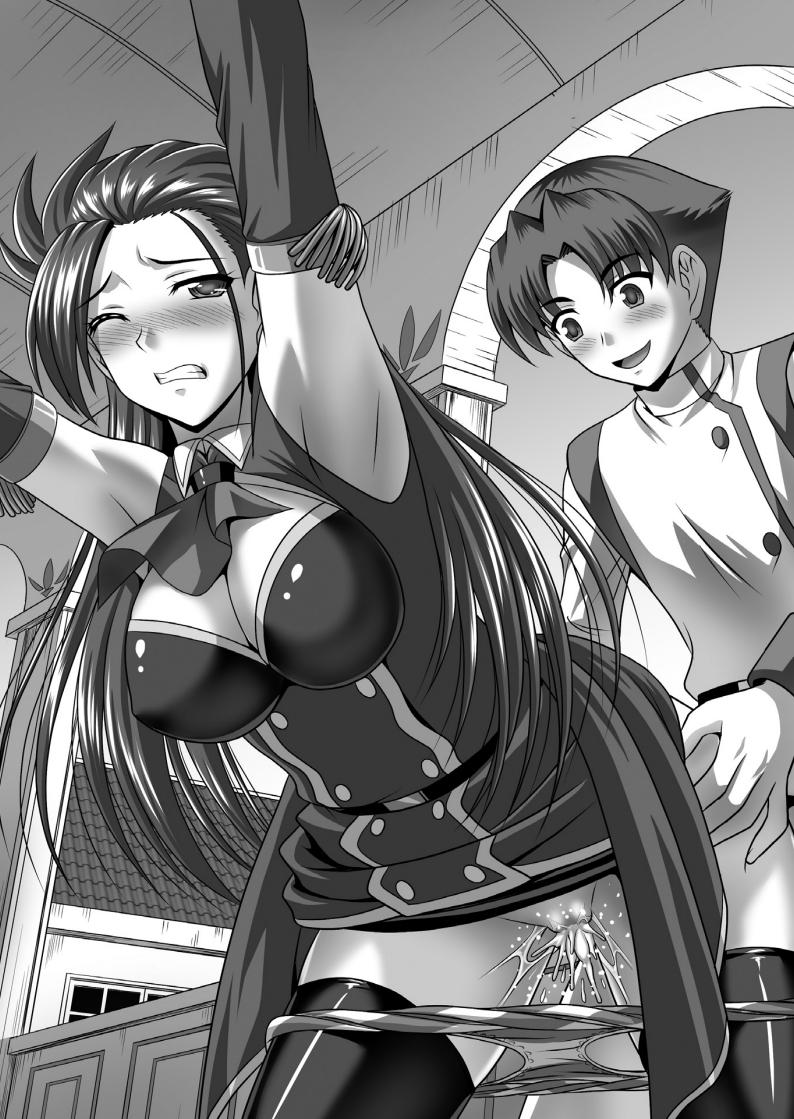
どびゅびゅびゅびゅ!!!

「明日オルフィオくんにこの花冠をわたしの頭に乗せてもらって、そこで将来、お嫁さんにするって約束してもらうの♪」

花畑では花の冠を抱きしめた無邪気なお姫様が、幸せな妄想に浸っている。

一方、その側近たる女騎士は、生々しい牡の洗礼を浴びていた。

「な、なかに入ってきている。熱いのがいっぱい。ヤバイって、このままじゃ赤ちゃんで



きちゃう♪」
動揺するバーバラの体内に思う存分に射精して、逸物が小さくなったところで、ようやくスペンサーは引き抜く。
「はぅ」
ぶるっと震えたバーバラの股間から、白濁液がトローッと溢れて、太腿の半ばで止まっていたショーツにかかる。
それを見たスペンサーは少し驚く。
「あ、血だ」
いわゆる破瓜の血というやつだろう。
スペンサーは初めて見た。
拳を握りしめてプルプルと震えていたバーバラは、必死に激情を抑える。
「このガキ～、よくもあたしの処女をこんなところで奪ってくれたわね。こんなのが初体験だなんて、フランギースやエウリカに知られたら爆笑されるわよ」
「うわ、ご、ごめんなさい」
予想を上回るバーバラの剣幕に、スペンサーは震えあがる。
「許さないわよ！　責任取らせる！　絶対に取らせてやるぅぅぅ！」
その後は場所を変えて、バーバラとスペンサーは猿のようにエッチを楽しんだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!